

まくことになったのである。

(2) 壁画と石刻の描く長安の都市生活

長安近郊から発掘された多くの墓には、墓道に壁画が描かれ、石棺に線刻画が刻まれている。表2は、長安(洛陽居住を含む)の居住地と長安近郊の葬地の場所がともに判明する墓の中で、壁画墓が描かれた墓のみを一覧表にしたものである。これらの墓壁画は、長安城内の居住地での官人の生活をうかがう絶好の資料となる。もちろん、壁画に描かれた生活情景は、生前の生活の一つの理想を描いたもので、必ずしも現実とは考えられないが、当時の社会風景を知るためのまたとない手がかりとなることは疑いない。

死後も生前の生活が続くという思想にもとづき、墓室には墓主の生前の生活を再現する物品がおかれ、墓道の壁画には生前の生活の一端が描写される。生前の身分秩序にしたがって死後も人は黄泉で生前と同じ生活をおくるので、都城近郊の墓の壁画や石棺の刻画は、各身分・階層・職業出身の長安住民の都市生活の一端を鮮やかに再現してくるタイムカプセルとなるのである。ここでは、唐の皇太子、皇族、宦官という異なる職業と身分をもつ三者の墓室の壁画と石棺に描かれた刻画をとりあげ、生前の都市生活の具体像を垣間見てみよう。

① 章懐太子・李賢(六五四―六八四)の狩獵図とボロ競技図

唐第三代皇帝・高宗と武則天の間の第二子である皇太子・李賢(章懐太子六五四―六八四)の墓の壁画が、七世紀後半の長安城内の東宮での皇太子の生活の一端を示していることもよく知られている<sup>(69)</sup>。李賢は、皇太子となりながら、六七九年に大臣暗殺の嫌疑を受けて皇太子を廃されて庶人におとされ、六八三年に巴州に左遷され六八四年に「自殺」を強いられた。李賢は、死後に名誉が回復し、七〇五年に武則天が亡くなると翌七〇六年に、巴州から都に遺体を移し乾陵に陪葬され、七一年に章懐太子の称号を受けた。

章懐太子・李賢の生活は、長安城外での狩猟図や、城内の東宮のポロ競技場と思われるポロの試合の有様から、視覚的かつ具体的に判明する。図16李賢（章懐太子六五四～六八四年）墓壁画の狩猟図のように、狩猟図は、長安郊外に狩猟にでかける皇太子たちの出で立ちを見事に描いており、長安近郊における狩猟活動の実態を初めて目の当たりに再現することが可能となり、文献による研究の限界を打ち破った<sup>(20)</sup>。

また、七～八世紀の長安城内で、中央アジアから将来されたポロ競技（馬毬）が大流行したことは、文献的にはよく知られていた<sup>(21)</sup>。図17李賢（章懐太子六五四～六八四年）墓壁画のポロ競技図のように、本墓壁画の発見は、文献で論じられてきた長安におけるポロの流行を、視覚的かつ具体的に明らかにした点において画期的であり、後の墓壁画研究にも大きな刺激を与えることになった。

## ②延福坊（C9）の李寿（五七七～六三〇）の楽舞図

李寿は、唐の世祖（李淵の父）の弟鄭孝王李亮の長男で、隴西狄道の人。延福坊（C9）に居住した。官爵は、開府儀同三司・上柱国・淮安郡王。没後に司空を賜る。図18李寿墓（五七七～六三〇年）石槨線刻画の楽舞図で知られる。李寿墓は、墓道に多彩な壁画が描かれた他に、墓室石棺に、石刻の妓女の楽団が描かれていることで有名となった。妓女楽団の楽器構成は、笙・排簫・大箏・横笛・小箏・雲和・琴・四弦琵琶・五絃琵琶・篳篥・箏・鞀・腰鼓である<sup>(22)</sup>。

この楽団編成の特色は、中央アジアやインド、ペルシアから伝わった新しい楽器と楽曲と、中国伝統の楽器と楽曲とが合奏されていることであり、特に、河西回廊の西涼楽の影響が大きいといわれている<sup>(23)</sup>。当時の長安城内における多彩な音楽の演奏が、貴族の日常にとって不可欠であったことを如実に物語る。

## ③安興坊（I3）の蘇思勗（？～七七五）の楽舞図

蘇思勗は、玄宗期の宦官で安興坊（I3）に居住した。蘇思勗墓は、長安城東郊の墓葬地区から一九五二年に発掘

図16 李賢（章懷太子 654～684年）墓壁画の狩猟出行図



【出典】 陝西歴史博物館。

【解説】 本図は、章懷太子・李賢の禁衛に当たった武官たち50数騎が、長安近郊（あるいは禁苑の中か）に狩猟に出かける光景を描いている。騎者の馬の上や腕の中には、狸猫（狸猫科、ニムラウス科 *Nimravidae* の動物）ないし狩猟豹（チーター *Acinonyx jubatus*）が2匹、狩猟用の鷹が2羽、猟犬（ハウンド猟犬 *Hound*）が2匹描かれており、7世紀の長安近郊における狩猟の情景をうかがうことができる。狸の獲物は、文献史料によれば野猪（山猪 *Sus scrofa*）や野兔（*Lepus sinensis*）、鹿（*Cervidae*）の類いだったと考えられる。当時、皇族・貴族の間で狩猟が流行し、唐高祖李淵の息子・李元吉が、并州（現太原市）に駐在中に、「3日間何も食べなくてもかまわない。しかし、狩りは一日として休む訳にはいかない。」と述べたことは、よく知られている（『旧唐書』巻64、高祖二十二子、李元吉、北京・中華書局、1975年、2420頁）。

図17 李賢（章懐太子 654～684年）墓壁画のポロ競技図



生前の空間、死後の世界（妹尾）

一一一

【出典】 陝西歴史博物館。

【解説】 本図は、長安城内で大流行したポロ競技の情景を描いている。おそらく、李賢の居住した東宮のポロ競技場で行われた様子を描いていると思われる。球杖（毬杖 スティック）をもつ騎者が、二つのチームに分かれて玉を取り合いゴールに打ち込む勇壮な光景である。当時の競技場は、球の滑りをよくするために、油をしいて定期的に石のローラーで整備していたという（『資治通鑑』巻209、唐紀25、中宗下、景龍2年秋7月甲午条、6624頁等を参照）。